

九州の森と林業

No.152 2025.6

就任にあたって

九州支所長 勝木 俊雄

本年4月1日付けにて九州支所長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。私は福岡県生まれで、中学・高校時代は鹿児島県で過ごしました。その後は、2021年に九州支所に赴任するまで、関東暮らしが35年間続いていたので、地元に戻ってきているようなものです。有明海の魚介類や南九州の焼酎などを通して、改めて九州の暮らしの良さを堪能しています。

これまで、主に東京にある森林総合研究所多摩森林科学園で樹木の分類や保全に関する研究をおこなっていました。2021年からの九州支所では、地域研究監、さらには産学官民連携推進調整監となって、国有林や県の研究組織、大学などと関わり、九州の森林・林業研究の現場を見て回ってきました。そうした現場を通して、これから日本全国で生じていくであろう森林・林業の問題に対して、九州はすでに直面していると感じています。

現在の九州では主伐・再造林が大規模に進められています。こうした林業・林産業の経済活動が活発になることは大変喜ばしいのですが、その反面、さまざまな問題も生じています。高齢化や過疎化が進む地域でこうした活動をどうやって維持するのか、人工林伐採後の再造林の効率化、シカ害対策、より良い苗木の生産、大径材の利用など、解決しなければならない研究課題を多く抱えています。

また、地球規模の気候変動による影響を強く受けていることも、九州の特徴です。大型台風や豪雨によって、毎年のように九州の山林は被害を受けています。これまで見られなかった熱帯・亜熱帯の病虫害の北上も報告されています。そしてまだ一般には認識されていませんが、樹木に対する気温上昇の悪影響も顕在化しつつあります。鹿児島の「染井吉野」の開花状況は以前から気になっていたもので、九州に来たからにはと調べてみました。すると、すでに鹿児島市では開花異常が常態化しつつあることが判りました。九州は温暖化問題の最前線でもあるのです。

2026年度から始まる森林総合研究所の第6期中期計画はまだ策定中ですが、こうした問題に直面している九州支所の重要性は高いと考えられます。これから、九州支所の研究者はもちろん、九州・沖縄地域の関係者の皆さんとの連携を強化し、こうした問題の解決に取り組んでいくつもりです。九州の森と林業のお役に立てるよう、ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。



統計データからみる 2010年代の日本の林業、九州の林業

森林資源管理研究グループ 笹田 敬太郎

森林・林業分野の統計には何がある？

統計データは、全国や各地の動向、地域ごとの特徴、それらの変化などを知ることができる重要な資料です。

森林・林業分野では、表1に示すような「農林業センサス」や「木材統計」、「森林組合統計」などが代表的な統計資料となっています。これらのデータは、いずれも農林水産省のホームページ上で公表されており、研究や行政の基礎資料として活用されています。なかでも「農林業センサス」は、一定程度の森林を有する林家や、伐採・育林作業に従事する経営体などの動向を全国的に把握できる重要性が高い基幹統計です。経時的な変化、各地域の地域性、各主体（森林組合や会社等）の占める割合などを明らかにする貴重なデータが多く含まれています。

したがって、森林・林業経営に関わる分野では、これまで「農林業センサス」のデータを用いて、各年の結果や複数年の変化を分析してきました。その結果の一部を紹介すると、全国的に素材（樹木を伐採し丸太に加工したもの）の生産量が減少していた1980、90年代に、九州だけは針葉樹人工林からの素材の生産量を維持していたこと（佐藤2002）、2000年代においても九州は高い森林生産力（森林面積当たりの素材生産量）を持っていたこと（興梠2013）などが報告されています。

それでは、その後の2010年代において、全国および九州の林業ではどのような変化がみられたのでしょうか。そこで、本稿では2010年、2015年、2020年の3回の「農林業センサス」のデータを用い、2010年代の日本の林業、および九州の林業の変化を分析した結果の一部をご紹介します。

表1 森林・林業分野の代表的な統計資料

名称	調査周期	調査方法	基幹統計
農林業センサス	5年	全数	○
木材統計	毎月・1年	標本	○
森林組合統計	毎年	全数	×
林業経営統計調査	5年	標本	×

注：全数調査では調査対象となる母集団の全てを調べ、標本調査では母集団の一部を調査して全体を推定します。

2010年代における日本および九州の林業の変化

「農林業センサス」からみた2010年代の日本および九州の林業に関わる変化の特徴として、主に以下の3点が挙げられます。

1つ目の特徴は、2000年代後半から増加傾向に転じた全国の素材生産量が、2010年代になって、さらに伸びていることです（図1）。「農林業センサス」によると、全国の素材生産量は2010年：1,562万 m^3 、2015年：1,989万 m^3 だったものが、2020年には2,041万 m^3 と、2010年の約1.3倍に増加していました。九州についてみると、2010年の350万 m^3 から2015年：458万 m^3 、2020年には508万 m^3 と、2010年の約1.45倍に増加しており、全国平均以上の伸びを示しています。各県ごとの状況を見ると、九州は、全県が生産量を伸ばしており、その中でも特に伸びが顕著だったのが鹿児島県（2.65倍）、ついで宮崎県（1.48倍）と、南九州の存在感が大きくなっています。

2010年代の林業の変化の2つ目の特徴は、林地に伐り捨てられていた間伐材・林地残材の利活用が大きく進んだことです。戦後植え

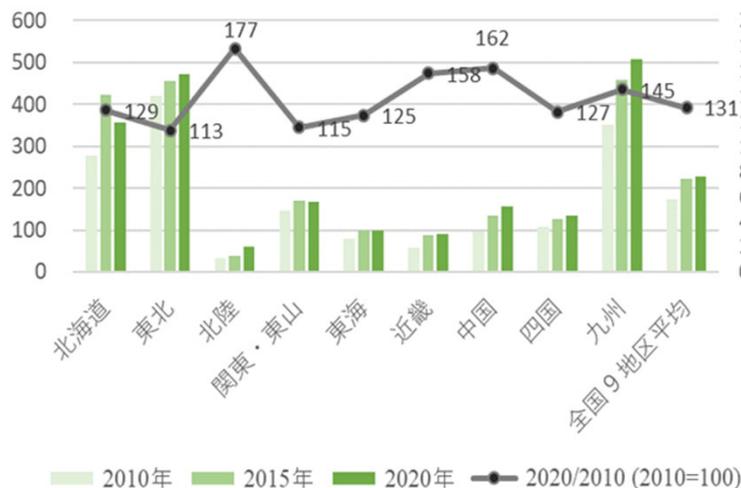


図1 2010年代の素材生産量の変化
(左軸: 素材生産量・単位: 万m³、右軸2010=100)
資料: 農林業センサス (各年度)



図2 2010年代の間伐面積の変化
資料: 農林業センサス (各年度)

られた人工林が利用できる大きさに成長したことに加え、木質バイオマスや合板への国産材利用などの新たな需要が創出されたこと、間伐への補助の対象が切捨間伐（伐った立木を林地内に放置したままにするもの）から利用間伐（伐った素材を林外に運搬し他に利用するもの）へ移ったこともあり、切捨間伐面積が減少し、利用間伐面積の割合（利用間伐率）が増えています（図2）。全国では2010年に30%台であった利用間伐率は2020年には約60%まで高まっており、九州は全国と比べても、その割合が高くなっています。

3つ目の特徴は、素材生産を行う経営体数が減少し、1経営体当たりの素材生産量が伸びていることです。全国では2010年に約13,000あった経営体が、2020年には約6,000と半分以下となっています。九州に関してみると、2010年に約3,100あったものが約1,300に減少しています。直近の2015年から2020年への変化をみると、とくに個人経営体の減少が大きくなっており、九州では全国平均以上の減少率となっています（図3左）。これらの減少が経営環境の悪化が原因なのか、経営者の高齢化に伴う引退によるものか、あるいは調査上の問題によるものか。これらの要因については、地域ごとに分析を加えるとともに、関係者への聞き取り調査によって、今後明らかにしていく必要があります。

以上のように林業経営体数が減少する中で、どのような経営体が素材生産量の増加に寄与したのでしょうか。

図3右の1経営体当たりの素材生産量の変化をみると、森林組合と民間事業者が大きく素材生産量を伸ばしており、とくに九州において森林組合の伸びが顕著となっています。その中でも、大分県、福岡県、佐賀県では、この間の素材生産量の伸びに対し森林組合が占める割合が90%以上となっていました。また、図には示しておりませんが、北陸や山陰地方などにおいても、森林組合が牽引する形で素材生産量が伸びていることが今回明らかになりました。

統計データの活用と課題、可能性

本稿で示したように、「農林業センサス」をはじめとした統計データでは、各地域の森林・林業、木材生産に関わるさまざまな動向や、変化をみることができます。今回はご紹介できませんでしたが、筆者が参画する研究プロジェクト（「変貌する日本林業のミクロデータ分析：農林業センサスと国勢調査を用いて」）では、回答者が回答したデータを突合することで、どういった経営体が参入し退出していったかなどの動向を分析したり、将来動向を予測したり、GIS（地理情報システム）と連動することでどのような地域で生産

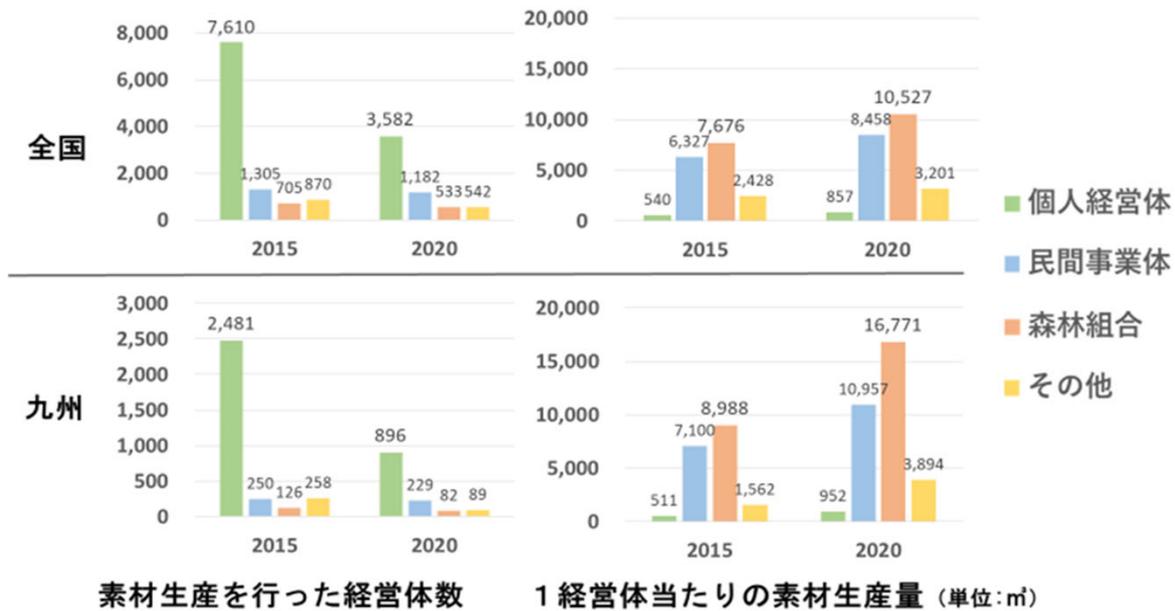


図3 素材生産を行った経営体の数（左）と1経営体当たり素材生産量の変化（右）
資料：農林業センサス（各年度）

量や経営体数、林業従事者数が変化したかを可視化するなどの分析に現在取り組んでいます。

統計は国や社会の姿を映す鏡であり、今を知り、未来を見通す羅針盤とも言われています。今後も、森林・林業に関わる統計調査（統計データ）が、日本の森林・林業の姿や変化を捉える役割は重要であり続けます。

しかしながら、検証が不十分なためデータの誤った数値が未修正のままであったり、調査項目の削減や変更によって経時的分析が困難になったりするなど、統計調査（統計データ）が抱える課題も少なからず存在します。そのため、統計でみえない動きを明らかにしていくこと、統計データと現場での実証作業を往復しながら確かめていくことも必要です。

統計は、行政や回答した方々、研究者だけのものではありません。ご回答いただいた関係者の協力に支えられている統計データを今後も活用し、皆様に有用な分析結果を示し、発信していきたいと考えています。

引用文献

- 興梠克久（2013）林業経営体の概要とセンサス分析の可能性. 興梠克久編『日本林業の構造変化と林業経営体2010年林業センサス分析』:19-40.
- 佐藤宣子（2002）森林資源からみた林業生産の地域性と森林保全. 餅田治之編『日本林業の構造的変化と再編過程－2000年林業センサス分析－』:44-55.

参考資料

- 農林水産省ホームページ「農林業センサス」
<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/>
- 総務省統計局ホームページ「統計の役割とは？」
<https://www.stat.go.jp/naruhodokids/role/>

森林総研チャンネル (YouTube) 配信中

令和6年度九州地域公開講演会

「ワクワクする！森林の博士が語る科学の魅力」

令和7年1月1日から、森林総研チャンネル (YouTube) にて講演動画を配信しています。

URL <https://www.youtube.com/playlist?list=PLZzxJYmW4GZ1rnK7fjqImIleBbNGJBLPx>



令和6年度九州地域公開講演会

ワクワクする!
もり
森林の博士が語る科学の魅力

会場
くまもと県民交流館パレア
〒860-8554 熊本県熊本市中央区手取本町8-9
テトリアくまもとビル10Fパレアホール

開催日
令和6年11月29日(金)
受付開始 13:00 ~
講演 13:30 ~ 16:30

事前予約不要
入場無料

【主催】 国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所九州支所
林木育種センター九州育種場
森林整備センター九州整備局
【後援】 熊本県、九州森林管理局

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

立田山森のセミナーのお知らせ

立田山森のセミナーは、森林を身近に感じていただくために、森林のいろいろなことについて、わかりやすく説明するセミナーです。

開催日・テーマが決まり次第ホームページ等を通じてお知らせしますので、どうぞお気軽にご参加ください。

昨年度のセミナーの様子

<第77回>

開催日：令和6年8月3日(土)

テーマ：スズメバチとのつきあい方

担当：森林動物研究グループ(昆虫)

募集：10名程度(参加者：8名)

スズメバチはどんな昆虫なのか、興味深い生態や行動を知っていただき、スズメバチとのつきあい方を学んでいただきました。



<第78回>

開催日：令和7年2月1日(土)

テーマ：立田山森の動物調査隊

担当：森林動物研究グループ(鳥獣)

募集：15名程度(参加者：14名)

立田山に暮らす森の動物について、野外での調査、双眼鏡の使い方、鳥や動物の識別方法、自動撮影カメラを使った調査等を体験、学んでいただきました。



<第79回>

開催日：令和7年3月8日(土)

テーマ：シイタケの原木栽培を体験してみよう！

担当：森林微生物管理研究グループ(特産)

募集：15名程度(参加者：11名)

日本人が古くから親しんできた「しいたけ」。しいたけの基本を学び、原木へのコマ打ちを体験していただきました。



地域連携推進室から

○森の展示館について

開館 平日のみ(土日祝日・年末年始は閉館)
9:30~16:30(12~13時除く)

入館 無料

予約 不要(団体様または説明員による解説を希望される場合は、事前の予約が必要です)
※業務都合によりお受けできない場合がございます

夏休み期間中は、土日祝日も開館予定です。
詳細が決まり次第ホームページに掲載します。

九州の森と林業 No.152

令和7年6月1日

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所九州支所

熊本県熊本市中央区黒髪4丁目11番16号

〒860-0862 Tel 096(343)3168(代)

Fax 096(344)5054

ホームページ

<https://www.ffpri.affrc.go.jp/kys/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。